

学校における卓越と排除

——「進学校」における二つのジェンダー——

山 口 健 二

Excellence and Exclusion in School

—— Gender Difference in a “Chartered” High School ——

YAMAGUCHI Kenji

は じ め に

学校における社会化の効力がその指導・教育の技術には完全に還元しえないことを最初にはっきりと認識したのは、マイヤーであった。彼は、学校の社会化の成否を左右するもう一つの要素として、学校の教育成果についての社会的コンセンサスに注目した。学校での教育経験を通じて卒業生がどのような属性・技能を身につけ、それによってどのような社会的地位に配分されるかという点については、ある種のコンセンサスが存在すること。このコンセンサスが明瞭な学校ほど、より優れた社会化性能を備えていること。そして、そのようなコンセンサスが明瞭である場合、学校の社会化の効力はその指導・教育技術に直接依存しないこと。これらをマイヤーは論証したのである (Meyer, 1970 a)。

マイヤーはこの社会的コンセンサスのことをチャーターと呼ぶ。そして、生徒の社会化——その学校に「見合った」生徒になること——は、学校組織による「外から」の指導によって達成される以上に、チャーターに従おうという生徒自信の「内から」の覚醒によって達成されるというのがチャーター社会化論の骨子である。チャーターによる社会化が学校の教育技術とは独立に進行するとされるのも、それがこの『内からの』覚醒』に起源を有しているからである⁽¹⁾。

本稿では、このチャーター社会化論を、いわゆる「輪切り選抜システム」との関連で論じようと思う。いうまでもなく、このような問題設定は本稿が初めてではない。高校が輪切り選抜システムを採っている場合、上位ランクの高校には「進学校」という明瞭な性格づけが与えられるため、これが一種のチャーターとして作用し、そこに在学する生徒のモチベーションを向上させる。これは様々な実証研究が繰り返し確認してきたファインディングスであった⁽²⁾。

この繰り返し論じられてきた問題を本稿であえて再び取り上げようとするのは、「進学校」というチャーターが発動する際にジェンダーという変数が関与しているという、従来あまり注目されてこなかった可能性を指摘したいからである。

われわれが獲得した一つのデータが「進学校」に入学することが男女で異なる結果を生むことを示している。そのデータとは、堅固な輪切り選抜システムで知られるある地域のトップ進学高校（公立）——以下、 α 高校と呼ぼう——のものであり、その生徒の入学当初の成績が三年間でどのように推移していくかを見たものである⁽³⁾。この α 高校においては三つの生徒グループが異なる成績推移のパターンを描いている。第一に男子の成績上位入学者層。このグループの成績は上向きに推移する傾向にある。第二に男子の成績下位入学者層。このグループの成績は下向きに推移する傾向にある。そして、第三に女子生徒。このグループの成績は、入学当初の成績にかかわらず中間化する傾向にある。

以下の論述でわれわれはチャーター社会化論を片手にこの三つのグループの成績推移を読み解いてゆくこととしたいが、そのガイドラインだけはあらかじめこの場で示しておこう。

第一のグループの成績が上向きに推移することは、これまでのチャーター社会化論でうまく説明できる。「進学校」のチャーターが彼らのモチベーションに対してポジティブな影響を与えたと考えればよいからである。第二のグループの成績が下向きに推移することも、マイヤーの議論を再検討すれば説明可能となる。チャーターが生徒のモチベーションにネガティブな影響を与える可能性もあることはマイヤー自身も指摘していることである。

要するに、男子生徒の場合はその成績推移は、チャーターを前提にすればうまく説明がつくということである。ところが、女子生徒の中間化する成績推移はそれでは説明がつかない。成績が中間化するということは、チャーターのポジティブな影響が現れるはずの上位入学者の成績が下向きに推移し、ネガティブな影響が現れるはずの下位入学者の成績が上向きに推移する、ということだからである。

チャーターの影響が見られるのが男子生徒に限られること、この点についてマイヤーは特に論じていない。本稿では、その説明としてハビトゥス論を援用しようと思う。そもそも、チャーターとは生徒が卒業後に占める社会的地位にまつわる表象である。チャーターが生徒に宣示する地位が希少なものであるかぎり、その獲得をめぐる競争の過程で、それを「当然の権利」と思う層と「縁遠いもの」と思う層の分化が生じる可能性は十分にある。この心理的一体感／疎外感の源泉となるのが他ならぬハビトゥスである。そして、この心理的一体感／疎外感がジェンダーという変数に対応しているとすれば、ジェンダーというハビトゥスを想定する根拠は十分にあるはずだ。

それでは、具体的な作業に取りかかろう。以下の議論は、まず、マイヤーのチャーターに関する議論を再検討し、チャーターがポジティブな影響とネガティブな影響の両方を与える可能性を指摘することから始まる（第一節）。この準備的考察の後に、 α 高校のデータに目を転じ、「進学校」のチャーターの影響が男子生徒と女子生徒でどのように異なるのかを確認していく（第二節）。その際、チャーターが再生産されるメカニズムについても若干の考察を加えるつもりだ。続く第三節において、ハビトゥス論を援用しながらチャーター効果に男女差

を生じさせる原理について考察しようと思う。そこでの主要な論点は、学校での競争に臨む際の心性が男女で異なっているということである。そして、これらの議論を総括する意味をこめて、最終節で学校における競争において努力主義イデオロギーが果たす役割についてコメントしようと思う。

1 チャーター効果再考——「進学校」の社会化効果についての準備的考察

日本ではこれまで、多くの研究がマイヤーのチャーター社会化論を輪切り選抜システムとの関連で論じてきた。そうした研究が提示した命題のうち最も重要なものは、いわゆる「進学校」の社会化効果に関するものである。

輪切りランクの上位校には、その卒業生は大学に行くのが当然だという明瞭な社会的コンセンサスが存在し、それが一種のチャーターとして作用すること。そして、その結果として、「進学校」に入学した生徒はそのランクに応じた高いモチベーションを抱くこと。これらの命題は実証的な立場からも繰り返し検証されてきたものであり、異論の余地のないものである。しかし、ここで注意しなければならないのは、従来の研究は高校間格差の形成過程を主要な関心としてきたという点である。そのような関心からすれば当然のことであるが、「進学校」の社会化についての議論は、主に輪切りランクの下位校の社会化との対照でなされることになる。

下位校との対照に置かれるとき、「進学校」の社会化効果はそのポジティブな側面だけが強調されてしまわないだろうか。これは、つまり、〈チャーター→社会化の成功〉という図式があてはまらない現象が見えにくくなるということである。

ここで改めてチャーター社会化論を読み返してみると、マイヤーは社会化の成功だけを問題にしているのではないことが判る。例えば、彼は別の論文（1970 b）で、ある種の生徒にとっては、威信の高いハイスクールに進学することがかえって大学進学モチベーションを低くする可能性があることを示唆している。

これに加えて、日本の「進学校」に付与されたチャーターが生徒の将来の地位を確約するものではないことも、チャーターが生徒のモチベーション分化をもたらす可能性を高める要因となる。「進学校」に入学した生徒には、チャーターが宣示する地位を実際に獲得できるかどうかをめぐる競争が用意されている。しかも、その競争における「優劣」は「客観的」な数値で表現可能なものであるため、生徒の側でもかなりの精度で将来の自分の達成水準を予測できる。この場合、学内競争で上位に立てるという見込みの高低がその後のモチベーションの高低を規定する度合いはより大きくなるだろう。

要するに、「進学校」のチャーターは生徒のモチベーションを向上させるだけではない、ということだ。輪切り選抜とはほぼ同じ成績水準の生徒を個別にプールする機構である。生徒は、自分の学校のランクだけでなく、学校の中での自分の位置にも敏感であるはずだ。学校の外部から見れば僅かな成績格差であっても、内部の当事者にとっては大きな断絶として主観されていることも十分ありうる。いってみれば、輪切り選抜は自信と同時に挫折感をも構

築する制度なのだ。そして、この自信と挫折感の分化が生じる可能性は、「進学校」の方がかえって高くなるということも起りうる。「進学校」なのに、ではなくて、「進学校」だからこそ、チャーターのポジティブな影響だけでなくネガティブな影響も想定しておく必要があるのだ。

そこで次節では、従来の輪切り選抜研究とは観点を変えて、学校間の、ではなくて学校内の成績格差に注目し、「進学校」というチャーターの影響を実証的な見地から検討しようと思う。着眼点は上の議論で既に示されている。第一に、ネガティブな意味でのチャーターの影響は、はたして実際に確認できるのかということ。第二に、より根本的な問題として、チャーターの影響——ポジティブな意味もネガティブな意味も含めて——は、どの生徒にも等しく確認できるものかどうかということ。

そして、すでに前節で示唆しておいたように、これらの問題を扱うとき、極めて重要な意味を持ってくるのがジェンダーという変数なのである。チャーター効果はジェンダーと「交互作用」をもっている。その詳細な意味は、先に紹介した α 高校のデータを参照してゆく過程で順次明らかとなるはずだが、その最も重要なポイントとなるのは、チャーターの影響は、ポジティブな場合であれネガティブな場合であれ、男子にのみ典型的な形で現れるということである。

2 チャーター効果と二つのジェンダー

(1) ファインディングス—— α 高校生の三年間の成績推移における性差

ここで紹介するのは、 α 高校の生徒の入学時点の成績が三年生時点でどう推移したかを跡づけたデータである。

〈表1〉は、入学時点の成績が五段階評価（自己申告⁽⁴⁾）で《上》だった生徒が高校三年生時点でどう分散するかを男女別に見たものである。〈表2〉と〈表3〉は、それと同じものを高校入学時点の成績が《中》《下》の生徒について見たものである。

一見して判るように、高校三年間の成績推移は男子と女子とでかなり異なった形を取っている。入学時に成績《上》であり、かつ三年生時点でもその位置を維持している生徒は、女子よりも男子に多くなっている（表1）。他方、入学時に成績《下》であり、かつ三年生時点でもそこに留まっている生徒も、女子より男子に多い（表3）。これらをまとめれば、女子よりも男子の方が、入学時の成績の上下がそのまま三年後の成績の上下につながる傾向が強い、ということができる。

成績《中》の場合も、男子と女子でかなり違った動きがある（表2）。女子の場合は、入学時に《中》だった生徒の大部分がその位置を維持するのに対して、男子の場合はかなりの部分が上下に散ってしまう⁽⁵⁾。

要点を男女別に整理しておこう。女子の場合は、入学時に成績中位層だった生徒はその位置にとどまり、《上》《下》の両極の成績層は中間化する傾向が明瞭である。全体として、当初の成績格差が三年間で縮小していく。しかし、男子の場合は、成績中位層は分散し、成績

表 1 入学時の成績《上》の生徒の三年生時点での成績分布（左が男子・右が女子）

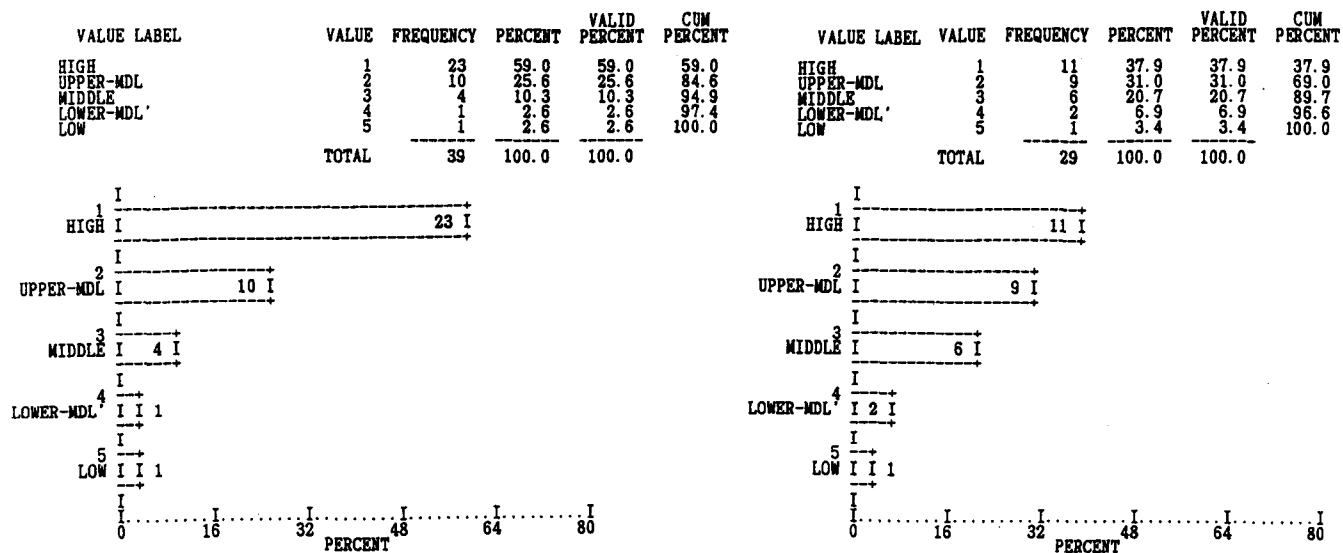


表1のまとめ

	三年生時点で 《上》	三年生時点で 《中の上》～《下》
男 子	59.0%	41.0%
女 子	37.9%	62.1%

表2 入学時の成績《上》の生徒の三年生時点での成績分布（左が男子・右が女子）

VALUE LABEL	VALUE	FREQUENCY	PERCENT	VALID PERCENT	CUM PERCENT	VALUE LABEL	VALUE	FREQUENCY	PERCENT	VALID PERCENT	CUM PERCENT
HIGH	1	5	9.3	9.3	9.3	UPPER-MDL	2	3	6.3	6.3	6.3
UPPER-MDL	2	12	22.2	22.2	31.5	MIDDLE	3	31	64.6	64.6	70.8
MIDDLE	3	18	33.3	33.3	64.8	LOWER-MDL	4	6	12.5	12.5	83.3
LOWER-MDL	4	7	13.0	13.0	77.8	LOW	5	8	16.7	16.7	100.0
LOW	5	12	22.2	22.2	100.0						
TOTAL		54	100.0	100.0		TOTAL		48	100.0	100.0	

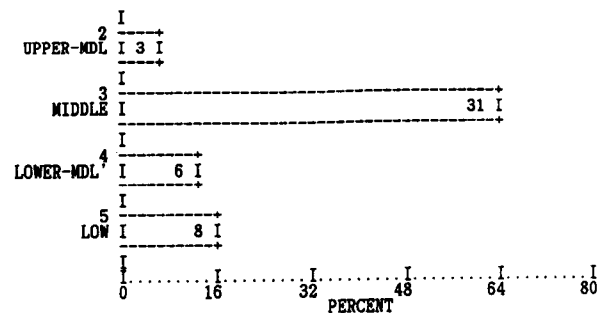
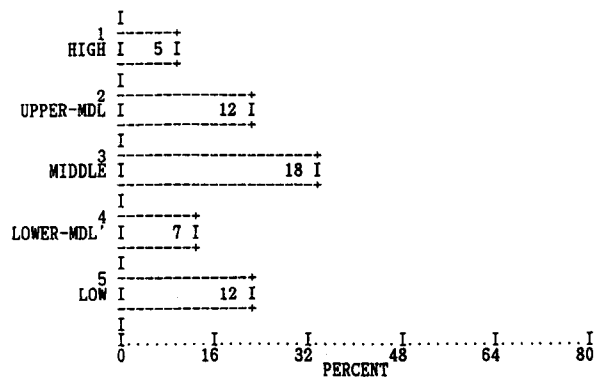


表2のまとめ

	三年生時点で 《上》《中の上》	三年生時点で 《中》	三年生時点で 《中の下》《下》
男 子	31.5%	33.3%	35.2%
女 子	6.3%	64.6%	29.2%

表3 入学時の成績《上》の生徒の三年生時点での成績分布（左が男子・右が女子）

VALUE LABEL	VALUE	FREQUENCY	PERCENT	VALID PERCENT	CUM PERCENT	VALUE LABEL	VALUE	FREQUENCY	PERCENT	VALID PERCENT	CUM PERCENT
HIGH	1	3	5.4	5.4	5.4	UPPER-MDL	2	1	2.9	2.9	2.9
UPPER-MDL	2	2	3.6	3.6	8.9	MIDDLE	3	6	17.6	17.6	20.6
MIDDLE	3	9	16.1	16.1	25.0	LOWER-MDL	4	9	26.5	26.5	47.1
LOWER-MDL	4	8	14.3	14.3	39.3	LOW	5	18	52.9	52.9	100.0
LOW	5	34	60.7	60.7	100.0						
TOTAL		56	100.0	100.0		TOTAL		34	100.0	100.0	

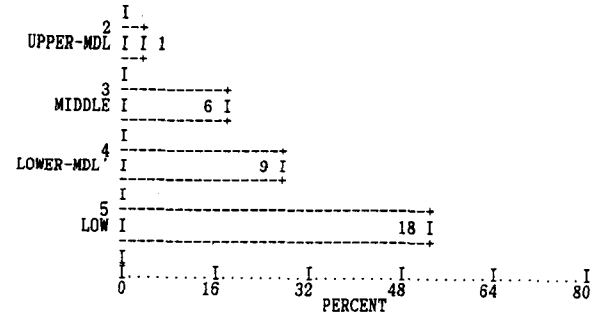
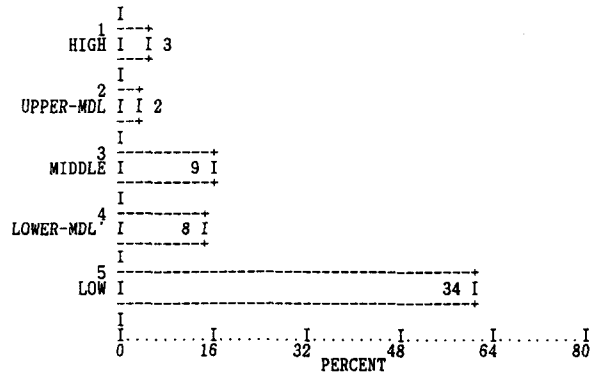


表3のまとめ

	三年生時点で 《上》～《中の下》	三年生時点で 《下》
男 子	39.3%	60.7%
女 子	47.1%	52.9%

上位層と下位層はそれぞれの極側に留まる傾向が読み取れる⁽⁶⁾。

男子の成績推移が二極化する傾向⁽⁷⁾があることは、成績下位入学者も上位入学者もともに α 高校の「進学校」というチャーターから影響を受けていることの結果であると考えられる。というのも、「進学校」に入学することで自信をつける場合も、挫折感からモチベーションが下降する場合も、いずれもチャーターという「予言」の効果である点では同じだからである⁽⁸⁾。つまり、チャーターの「予言」する進路（「銘柄大学」進学）を実際にたどることができるような生徒（成績上位層）は、その「予言」がモチベーションを向上させる契機となり、他方、そうでない生徒（成績下位層）は、その「予言」の存在ゆえにかえってスポイルされてしまうのである⁽⁹⁾。

これに対して、女子生徒の中間化する成績推移はチャーターという「予言」の効果としてはうまく説明がつかない。「予言」がポジティブな影響を持つはずの上位入学者の成績が下向きに推移し、ネガティブな影響を持つはずの下位入学者の成績が上向きに推移しているからである。そうした「予言」など「他人事」であるかのように、成績上位層にとっても成績下位層にとってもチャーターの影響は不明瞭である。

男子の場合、チャーターの影響として成績分化が生じるにもかかわらず、なぜ女子にその影響が見られないのか。これは極めて重要な問題である。しかし、これはチャーター社会化論そのものでは説明がつかない問題でもある。そこで、この問題は本稿第三節以降で改めて扱うこととし、本節では以下しばらく、 α 高校のデータの検討を続けたい。

(2) ディスカッション——チャーターの再生産における男女の「役割分担」

α 高校のデータは、チャーターがモチベーションの分化をもたらす可能性を示しているが、このことはチャーター社会化論に対して一つの問題を提起する。それは、チャーターという社会的コンセンサスがいかに維持されるのかという問題である。

従来の輪切り選抜の議論では、〈輪切りのランクが高い→チャーター→社会化の成功→チャーターの再確認→輪切りのランクの明確化〉という循環図式の中でこの問題は解決されてきた。しかし、この図式は、チャーターが成績分化の契機でもあるとすれば修正の余地が生じる。というのも、個々の学校の内部で成績が上下に分化することは輪切りのランク間の格差が攪乱されることを意味するからである。実際、竹内（1991）は、輪切り選抜のもとでさえ進学する大学ランクの逆転（ランクの下的高校の成績上位層が進学した大学にランクの上の高校の下位層が進学できない）が少なからず起こっていることを確認している⁽¹⁰⁾。このような輪切りの攪乱現象は、「進学校」の社会的な評価の再検討を促す重大な契機となるはずのものだ。それにもかかわらず、多くの場合「進学校」の評価は安定したものである。

したがって、われわれが問わねばならないのは、チャーターによる社会化が部分的には不首尾に終わるにもかかわらず、チャーターという社会的コンセンサスが信憑性を失わないのはなぜかということである。

ここで、チャーター社会化論は、そもそも社会化の成功と不首尾が並立できることを説明可能な理論であるということを確認しておくのは有意義であろう。それというのも、この理

論の最も挑発的な含みは、ある種の学校組織は、その内部で進行している現象とは無関係に社会化の効力を発揮することができるという点にあるからである。たとえ、うまく社会化されなかった生徒が出てきたとしても、そのことが学校の社会化性能への嫌疑に直結しない。チャーターによる社会化の効力は、少なくとも理念型的には、社会化の成否とすらも「脱連結 (decoupling)」(Meyer & Rowan, 1977) されうるのである¹¹⁾。

もっとも、このような社会化の不首尾の免責が効果的に作動するのも、社会化作用が成功裏に進行していることが証明されるかぎりにおいてであることも忘れてはならないだろう。しかし、ここでいう証明も決して事実的な証明である必要はない。成功が効果的にドラマタイズされるのであれば、そこには「信用の論理 (Meyer & Rowan, 1977)」が働き、学校が期待されたとおりの活動を果たしているという体面が疑われることはない¹²⁾。

このような「儀礼的な」証明にとって、 α 高校の場合、男子の成績上位層が重要な役割を果たしているのはまちがいない。 α 高校の「英雄 (Deal & Kennedy, 訳書 1983)」を演じ、その社会化効力の信憑性を誇示するのは、多くの場合、彼らである¹³⁾。その「業績」は「合格体験記」等を通じて生徒・父兄に周知されるし、外部にも様々な形で広報される。いわば、彼らは一種の「ショーウィンド効果」を担っているのである。

他方で、「進学校」がその信頼を獲得する上で、女子も別の形で貢献していることを指摘しておいてもよいだろう。女子生徒は輪切りの安定性の証拠を用意する。というのも、 α 高校の女子生徒の成績は中間に向かって推移しており、これは学校間の成績格差がより明確化することを意味するからである。もし、女子生徒がいなければ、はたして輪切り体制がこうまで安定したものとなまされているであろうか。もし、女子生徒も男子生徒と同様、その成績推移が上下両極に向かうものであるとすれば、竹内が確認したような輪切りランクの攪乱現象はもっと頻繁に観察されるようになってはいるはずだ。逆説的なことであるが、チャーターという社会的コンセンサスの安定性がチャーターから影響を受けないグループ (= 女子生徒) によって支えられている可能性があるのである。

先に挙げた〈輪切りのランク→チャーター→社会化の成功→チャーターの再確認→輪切りのランクの明確化〉という循環図式は、チャーターが維持されるメカニズムとしては確かに正しい。しかし、これを事実的な循環であると考えるのであればミスリーディングである。その循環が進行していることは常に「儀礼的に」確認されるに過ぎない。チャーターが再生産されるのは、チャーターの付与された学校が社会化を成功させる力を備えていると同時に、社会化の不首尾を隠蔽する力も備えているからである。事実的な反証を「儀礼的に」棄却できること、この点にこそチャーターが一つの「神話」とみなされる根拠があるのである。

3 ジェンダーというハビトゥス——チャーター効果の男女差の説明のために

(1) α 高校の男女の成績推移の説明原理——ハビトゥス論を手がかりに

前節では、チャーター社会化理論からの予測と実際のデータが適合するのは男子生徒に限られることを確認してきたが、その説明はあえて留保しておいた。チャーターの影響はなぜ

女子には及ばないのか。この問題はチャーター社会化論そのものでは説明できない。そこで、本節では新たにブルデューの議論を援用し、その説明を試みようと思う。

そもそも、チャーターとは生徒が卒業後に占める社会的地位にまつわる表象である。しかし、 α 高校のチャーターは決してその地位を確約するものではない。 α 高校への入学によって生徒に与えられるものは、地位そのものではなくて、この地位をめぐる競争に参加する権利にすぎない。

比喩的にいうならば、 α 高校の生徒は一種の「ゲーム」の参加者であるということができよう。それは、その「勝敗」がチャーターの宣示する地位を実際に獲得できるかどうかで決まる「ゲーム」である。

ゲームのメタファーをここに用いるのは、 α 高校の生徒がチャーターにまつわる競争に臨む際の「真剣さ」という変数の果たす役割をうまくイメージできるからである。競争に「真剣に」臨むかどうかが重要なのは、それによって、同じ競争であってもその意味が参加者によって異なったものとして主観されるからであり、競争そのものが実際にたどる筋道が異なってくるからである。

この「真剣さ」という概念の内包を示すために、ブルデューの議論（1990）を援用しておこう：

男というものが、社会的に割り当てられたあらゆるゲームに子供のように夢中になるような形で、社会的に制定されている（女との対比において）のは、この *illusio* [ゲームは是が非でも、最後まで規則に則ってプレイされるべきだという幻想] のなせるわざなのだ。……根本的区分の原理、人間を男と女に分かつ……原理は、男たちに、より真剣なゲームを割り当てるのであり、男たちを生産する特殊的社会化作業は、真剣なゲームに真剣に取り組むような性向を彼らに与え、社会的世界が真剣なものとして構成するゲームを……「真剣にプレイする」嗜好を与えるのである（訳書 1990, 122 頁）。

ゲームの虚偽性に対して疑問を持つ必要もなく、ということはつまり、何のためのゲームかということを考慮する必要もなくゲームに没頭できるという男性のハビトゥスは、ゲームというものの真の意味で正当な参加者は男性であるという社会的信念の反映である。女性の場合は、このようなゲームとの自然な一体感はなかなか得ることができない。女性的発想というものは、本質において機能主義的であり、彼女たちが何かのゲームに参加する場合でも、それが何の役に立つのか、またそれが自分の将来の「キャリア」に対してどのような展望をもたらすのか絶えず自問される。そして、この自問こそが、ゲームとの「自然な」一体感を阻害するものなのである。

今ここで、 α 高校の男子生徒と女子生徒は、それぞれが異なるハビトゥスを備えていることの結果として、このゲームを「真剣にプレイ」するかどうかという点で異なってくると仮定しよう。そうすれば、 α 高校の男子の成績は二極化し、女子の成績は中間化するという現象をうまく説明できるようになる。

α 高校の男子の場合、入学当初の成績の成績格差がなかなか転覆されないのは、このゲームを彼らがより「真剣にプレイする」からなのだ。彼らはいってみれば卓越化の病にとり憑かれているのである。そのゲームに対する「真剣さ」はゲームの「勝敗」ととことんまで決せずにはおかない。優位に立っている者はさらにその優位を拡大しようとするため、不利な立場に立たされた者がそれを回復するのは困難となる。そして、ゲームにおいて不利な立場に立たされた者とはいうと、彼らもまたゲームは「真剣にプレイ」されるに値するという倫理感を共有しているがために、誰にいわれるともなく、自分で自分に「敗者」のレッテルを貼ってしまう。チャーターのネガティブな影響が男子の成績下位層に特徴的に現れるのはそのためであろう。ゲームの「勝者」となるにせよ「敗者」となるにせよ、 α 高校の男子生徒はチャーターによってセッティングされるゲームから逃れることができないようなハビトゥスを備えているのである。

これに対して、 α 高校の女子生徒の中間化する成績推移は、彼女たちが本質的な点においてゲームから排除されていることの帰結であるといえる。彼女たちには「特権を争うゲームに騙されないという（否定的な）特権（Bourdieu, 同上 122 頁）」が付与されているがゆえに、たとえ成績下位で入学したとしても、男子生徒であれば感じたとような挫折感や悲壮感とはある程度まで無縁でいられる。女子の成績下位層が、男子の下位層に比べて、勉強に意欲的になれるのはそのためであろう。

結局のところ、チャーター社会化論はある種の社会的地位をめぐるゲームの「勝者」と「敗者」の役回りを記したシナリオなのだが、そのシナリオ通りに事が進むためには、あくまでもこのゲームが「真剣にプレイ」される必要があるといことだ。「真剣さ」を制限された参加者に対しては、これとは別のシナリオを用意しなければならないだろう¹⁴。

(2) 「インポスター感情」、あるいは排除される卓越者の心性

ところで、競争から排除されていることの「気軽さ」ゆえに、女子の下位入学者層の成績が上向きに推移するのは納得がいくとして、上位入学者層の成績が下向きに推移するというのは、どう考えればよいのだろうか。

この問題に解答するためには、競争から排除されているにもかかわらずあえて競争での卓越を目指す者の心性を推察する必要がある。ここでそのヒントを与えるのが女性臨床心理学者クランス（訳書 1988）のいう「インポスター感情」である。

彼女は豊富な臨床経験をもとに、ある種の「卓越者」は自らの過去の成功を心理的にキャンセルしてしまう性向にあることを見出した。

彼女はこのような性向にある者を「インポスター」と呼ぶ。「インポスター」とは「詐欺師」のことであり、「インポスター感情」とは他人を「だましていく」という感情である。なぜそのように感じるのか。それは、「インポスター」が「自分は本当は能力がないのに、他人が自分を『能力ある者』として評価している」という意識を抱いているからである。「インポスター」は自分の成功に不信感をもつ。成功の原因を、自分の能力や知識以外の要素、つまり、自分にとって外在的な要素に帰属しないと安心できない。

議論に具体性を持たせるため、クランスが臨床から得た例を一つ紹介しておこう：

《臨床例1 シェリー＝自分の会社を持つまでに成功したビジネス・ウーマン》

彼女の仕事は、非常に成功し、五人のスタッフを抱えるまでになりました。彼女の純益は年間七万ドル以上にもなります。しかし彼女の成功が話題にのぼったり、セミナーやビジネス・ウーマンのためのパネルで話をするように頼まれたりすると、彼女は静かに、しかし断固とした口調で、自分が成功できたのはただ運がよかったからだ、スタミナがあって非常に激しく働いたからだ、というのです。

シェリーは、自分がすばらしい判断力をもっていること、そしてまた、これまで非常に優れたビジネス上の決定を下してきたことを、自分自身で認めることさえ恐れているかのようにです。自分が成功したのは、叔父のおかげだと考えてもいます。その叔父は、冒険的事業を成功させたことで有名になった優れたビジネスマンで、彼女が最初の仕事を見つけるのを助けてくれたのです。

彼女はまた、これからはもう成功できないかもしれないいつも考えています。運がよく、激しく働き、しかも適切な人物（彼女の叔父）を知っていたおかげで、ビジネス界でここまで成功でき、現在の地位まで登ることができたと思っているために、同じように成功し続けることはできないかもしれないという恐怖が生まれ、それに苦しんでいるのです（12頁）。

このインポスター感情は、女性が卓越の対価として払う心理的コストを推察する手がかりを与えてくれる¹⁹⁾。彼女たちは、成功すればするほどに、自分の過去の達成を信用できなくなるため、自分の能力を「正しく」査定できなくなるのである。つまり、他人が自分の能力をいかに高く評価しても、「あの人は私をかいかぶっている」と考えるようになるのである²⁰⁾。

クランスの議論は、能力意識についてだけでなく、努力意識についてもさらに重要な含みがある。インポスターの他人を「だましている」という意識がさらにエスカレートすると、「必要以上に」努力するようになるというのだ。つまり、「だましているのがばれるのではないか」という危惧から、他人には「不自然」と映るほどまでに遮二無二努力するというわけだ。

ここでもクランスの臨床例を紹介しよう。多少長くなるのだが、そのディテールのヴィヴィッドさを損ないたくない：

《臨床例2 ジェイン＝優等生の「折り紙つき」の社会学の大学院生》

しかし、こうした数々の〔指導教官や同級生の〕賛辞にもかかわらず、ジェインが体験していたのは、自分自身の知能と能力に対する強い疑問だったのです。彼女は、自分ができる以上のことを他の人たちが自分に期待しているのではないかと感じます。そして、本当は見かけほど自分の頭が良くないということがその人たちに分かってしまうのではないかと恐れています。もちろん彼女は、これまで、自分に知らないことがあると

いうことを気づかれないようにしてきました。しかし今度こそ、そうしたパターンを繰り返せなくなるのではないかと心配しているのです。

最初の試験予定日が発表されました。……今回の試験に関してはとても心配になり、吐き気を感じるようになりました。この数日間は、満足に食事も取れなくなっています。彼女は、少しの時間も惜しんで勉強をします。また決まって毎晩、試験に関係のある夢を見ます。……〔試験に出題された〕質問の意味が理解できず、まったく答えが書けないのです。こうした夢を見ると、ジェインの不安はますます強まります。表面的にしか理解できていないと思い込んでいることばかりを考えて、心を痛めることになるのです。

試験当日、ジェインは早く起き、ノートを全部見直します。それでも彼女は、自信が持てず、非常に緊張しています。教室に着いた彼女の手は細かくふるえています。しかし、……彼女の夢は実現しなかったのです。質問の意味を理解できますし、答えもわかります。ジェインは、試験時間中、自分が細かい点まで全部覚えていることに安心しながら、凄いい勢いで答えを書いていきます。

試験が終わり、何人かのクラスメートに誘われて近くのバーでビールを飲むことになりました。学生たちは、集まると、試験について話し始め、自分の考えや答えについて説明していきます。ジェインは、他の人の答えが非常に優れているような印象を受けます。自分よりもずっと優れているように思えます。……他の人に聞かれた彼女は、試験に落ちるのではないかと心配を口にします。皆は彼女を慰め励まします。しかし彼女は、いまにも泣きだしそうになります。……

一週間後に答案が返されました。非常に驚いたことに、彼女の評点はAでした。彼女はまた成功したのです。一時的にですが彼女は、とても気持ちよく感じます。しかし、三週間後に別の試験の予定が発表されると、彼女は再び、失敗に対する強い恐怖と疑問に満ちた苦痛な体験を繰り返すことになります。今度も彼女は猛烈に勉強し、でも準備不足だと確信して試験場に入ります。しかし今回も彼女は良い成績を取ります。……

ジェインの指導教官は、彼女が非常に優秀であると言いますが、彼女はそれを信じる事ができません。これまでの良い状態を続けることができないのではないかと心配し続けているのです。繰り返し成功しても、自分が非常に優れた女性だとは確信できないのです（前掲書8頁）。

われわれは「女性＝卓越者」のこのような余裕のない努力心性と「男性＝卓越者」の確信的な努力心性とを区別すべきであると思う。「女性＝卓越者」の一見貪欲的な努力のドライブとなっているのは、努力が成功によって報われるという確信ではなくて、努力がまだ足りないというアノミー的焦燥感であり¹⁷⁾、この内面的な焦燥感は、努力すればするほどにかえって強化される性格のものである¹⁸⁾。

既に見たとおり、α高校の女子の場合、入学時に《上》の成績であっても、三年後もそれを維持している生徒は男子より少なかった。女子生徒にとっては、好成績が必ずしも自信の

根拠とならず、かえって自信を失う契機となる場合すらありうるとすれば、その好成績を維持することに男子以上の心理的困難が待ち構えているはずだ。その点からして、中間の成績になるということは、成績下位層の場合と同じく、上位層にとっても「気軽さ」の源泉となりうるのである¹⁹⁾。

以上、ブルデューとクランスの議論を手がかりとして、競争に臨む際の男女の努力心性の相違を論じてきた。α高校のチャーターが男女で影響の仕方が異なっているのは、二つのハビトゥスが相異なる心性を産出するからだ、というのがここでの仮説である²⁰⁾。本項で見たような努力心性を産出する女子生徒のハビトゥスは、前項で見た男子生徒の「卓越主義」のハビトゥスとの対比で捉えるならば、「人並主義²¹⁾」のハビトゥスとも言えるだろうか。ところで、努力とは日本の学校教育を考える上での重要なキーワードであることは、今さら指摘するまでもないことである。そこで次節では、本論文の総括として、学校における「努力主義イデオロギー」とジェンダーの関係について論じておきたいと思う。

4 学校における排除と搾取

われわれは前節において、競争に臨む際の心性について、焦燥感を伴う「女子＝卓越者」の努力と確信に満ちた「男子＝卓越者」の努力とを対照させてきた。この対照は、ブルデューが「趣味」に対するプチブルの姿勢とブルジョワの姿勢を対照させたこととホモロジーをなす。

ブルデュー（訳書1990）は趣味の領域における文化的な卓越化ゲームにおいて、プチブルの「食欲さ」のハビトゥスとブルジョワの「闊達さ」のハビトゥスを対照させた。そして、このプチブルが趣味に対して注ぐ過剰なまでの努力が、実は彼らがこの卓越化ゲームから本質的な点で排除されていることの結果であることを見抜いていた。ブルジョワは決して努力をしないわけではない。ブルジョワが趣味に対して過去に注ぎ込んだ努力は、たとえそれが量的に相当なものであるとしても、それがプチブルの食欲でゆとりに欠ける努力と対照されるとあまりにも「自由」で「自然」に見えるため、努力していることすら悟られないだけのことである。これに対して、プチブルは、たとえ費やした努力量という点ではブルジョワに劣らないような場合ですら、趣味との一体感を欠くために、常に自分の無知をさらけ出したり、失態を演じたりするのではないかという不安につきまといわれる。そして、この不安こそが、プチブルを「趣味の大家」となることを実際に妨げるもののなのであり、卓越化ゲームでのブルジョワに対する敗北へと彼らを導くもののなのである。

α高校の成績上位入学者は、男子生徒であれば成績が上向きに推移するが、女子生徒であれば下向きに推移する。このデータは学校という領域における「卓越化ゲーム」において、女子生徒が「勝者」となる機会を排除されていることを端的に示すものである。それにもかかわらず、女子生徒がこのゲームへの参加を継続するのなぜなのだろう。本稿の総括を兼ねて、最後にこの問題を論じておきたい。

女子生徒のゲームからの排除は、二つの社会学的な仕かけによって隠蔽されている。

第一に、このゲームは、参加するすべての男子生徒が「得」をするようにもなっていないければ、すべての女子生徒が「損」をするようにもなっていない。成績下位入学者の場合は、男子生徒と女子生徒とで有利と不利が逆転することは既に見た。このゲームにおいては、女子生徒は「勝者」となる優越感を剥奪されることによって、「敗者」となる挫折感を免除されるのであり、その点では、男女の「損得の総和」は拮抗するのである。

そして、第二の仕掛けが努力主義イデオロギーである。 α 高校においては、学校での「勝敗」を決定するのは努力だという信念が生徒に深く内面化されているのだが⁽²⁾、女子生徒がこの努力主義イデオロギーを内面化するとき、彼女たちのゲームからの排除は決して排除として主観されることがない。「女子＝卓越者」は「努力の不足」を感じ、自発的にゲームから撤退するのである。そもそも、努力とは、ゲームを「真剣にプレイする」という男子のハビトゥスにとってより適的な行動である。努力して成果が得られるかどうかは、実は努力以外の社会的要因によって決定されているのであるが、努力主義イデオロギーはこのことを隠蔽し、誤認させる作用を果たすのである。

しかし、女子のゲームに対する「忠誠」の維持について語るためには、努力主義イデオロギーが排除を正当化するイデオロギーであることを知るだけでは十分ではない。彼女たちもこのイデオロギーの称揚に加担しているという点を認識しておく必要がある。

ここで確認しておかなければならないのは、学校が努力主義を称揚するのは女子の排除を直接に意図してのことではないということである。学校の第一次的な目的はあくまで生徒の社会統制である。この目的からすれば、一途に努力する女子生徒は、学校にとってむしろ歓迎されるべき存在であり、排除されるいわれは何もない。

学校が社会統制の必要から努力主義を称揚する場合、努力の意義がその成果によって承認されるかぎりでは、その効力は半減する。「何かが得られるから努力しろ」という説得は、その「何か」が得られる可能性が低い場合には受入れられないからである。努力そのものに意義があることが倫理として信じられなければならないのだ。努力家のモデルとして学校が参照するのがしばしば「女子＝卓越者」であるのは、このためである。「男子＝卓越者」を努力家のモデルとして掲げることは、競争が彼らにとって有利な状況にあることの結果として、その努力が現実的な成果を生むことが多いゆえに、また、彼らの努力する姿勢があまりにも「自由」に見えるがゆえに、社会統制という目的からは、かえって不都合である。

このゲームにおいて、「女子＝卓越者」が時に「不自然」なまでの勤勉さを示すのは、繰り返し述べたように、彼女たちがこの競争から排除されていること、競争に勝ち抜く上での社会的条件の点で男子よりも不利な状況にあることの結果である。彼女たちがこの競争での卓越を維持するためには、あらゆる資源——時間や熱意——を動員するという戦略を取らざるをえないのだが、そのような女子の戦略が学校の社会統制過程の中に掠め取られるのである。

つまり、女子生徒は、社会統制のイデオロギーとしての努力主義によって明示的に称賛され、正当化のイデオロギーとしての努力主義によって暗示的に排除される仕掛けになっているということなのであり、この仕掛けによって、女子生徒は、結果的に自らを排除すること

となるイデオロギーに進んで加担するように仕向けられるのである。

より「自然」に努力できるのも、努力によってより高い成果を挙げることができるのもに男子生徒であるということ。そして他方で、その努力の価値を称揚するイデオロギーを支えるのが女子生徒であるということ。これはブルジョワ文化を称揚するのがブチブルであることとパラレルである。「支配者」の成功を約束する条件を作り出すのが「被支配者」であるという意味において、学校における卓越化ゲームにも一種の文化的搾取が埋め込まれているのである。

注

- (1) 『『外から』の指導』『『内から』の覚醒』という表現は、ウェーバー（1956）の「カリスマ的教育」の議論から借用である（訳書 1962, 487 頁）。
- (2) 参照すべき研究は少なくない。最も総括的なものとして、岩木・耳塚（1983）を挙げておく。
- (3) 本稿で扱うデータは、京都大学教育学部教育社会学研究室が 1991 年 9 月に実施した調査からのものである。調査の概要、データの属性等については、京都大学教育学部教育社会学研究室による報告書（1993）を参照のこと。
- (4) 自己申告であるというのは、このデータの問題点の一つである。しかし、 α 高校では、重要な学力試験の結果は学内順位とともに公表されており、自己の学内の位置は生徒にとってかなりヴィジブルである。しかも、申告された成績が上下に大きく偏っていないことから、生徒の申告にある程度の信憑性があると判断できる。
- (5) 成績《中の上》と《中の下》の場合は、データは不明瞭さを増すものの、それぞれ成績《上》と成績《下》の場合と同趣の傾向を読み取ることができる。
《中の上》の場合は、そこから上昇する生徒は男子の方が多く、下降する生徒は女子の方が多い。逆に、《中の下》の場合は、そこから上昇する生徒は女子の方が多く、下降する生徒は男子の方が多い。いずれの場合も、男子の成績はそれぞれの極側に向かって推移し、女子の成績は中間に向かって推移しているわけだ。
なお、ここで付け加えておくが、成績《上》～成績《下》の五段階のいずれの場合においても有意性の検定にはこだわらず、傾向性を読み取ることが重視している。サンプルがかなり細かく分割されるためである。
- (6) 入学時点と三年生時点の全体的な成績構成は〈表 4 a〉〈表 4 b〉のようになる。女子の成績は、入学時点では五段階ではば均等に分布していたものが、三年後の分布は中央付近に集まるようになる。（表 4 a）。男子の分布の形は三年間でほとんど変わらない（表 4 b）。
この結果が輪切りの選抜以外の要因に基づくものであるという可能性は、もちろん否定しきれない。しかし、輪切りのランクでこの α 高校のすぐ下に続く高校でも男女で同様の成績推移が確認できること、および、この二校と通学圏を共有する公立の中学校——小学区制であり、輪切り選抜とは無縁である——ではこのような推移は確認できないことは、ここに報告しておきたい。
- (7) 以後、男子生徒の成績推移傾向を表現するのに、この「二極化」という表現を多用することとなろうが、これはあくまでも「女子生徒との対比において」という意味においてである。〈表 4 a〉を見れば明らかのように、正確には「両極側に留まる傾向」とすべきところであるが、記述の煩雑さを避けたと思う。
- (8) 正確に言えば、〈表 1〉～〈表 4〉は成績の分化を示すものであって、モチベーション分化を示すものではない。これらのデータはモチベーション分化が生じていることを予測させるにとどまる。しかし、女子より男子の方が、入学当初の成績によるその後のモチベーション分化が著しいことは別のデータで示すことができる。ここでは数表を掲げないが、入学時の成績と「授業にどのくらい打ち込んできたか」を男女別に見ると、成績分化の場合と相似的なモチベーションの分化が生じていることを確認できる。ちなみに、この二変数の間の順位相関係数を算

表 4 a 入学時点と三年生時点の全体の成績構成：男子（右が入学時・左が三年時）

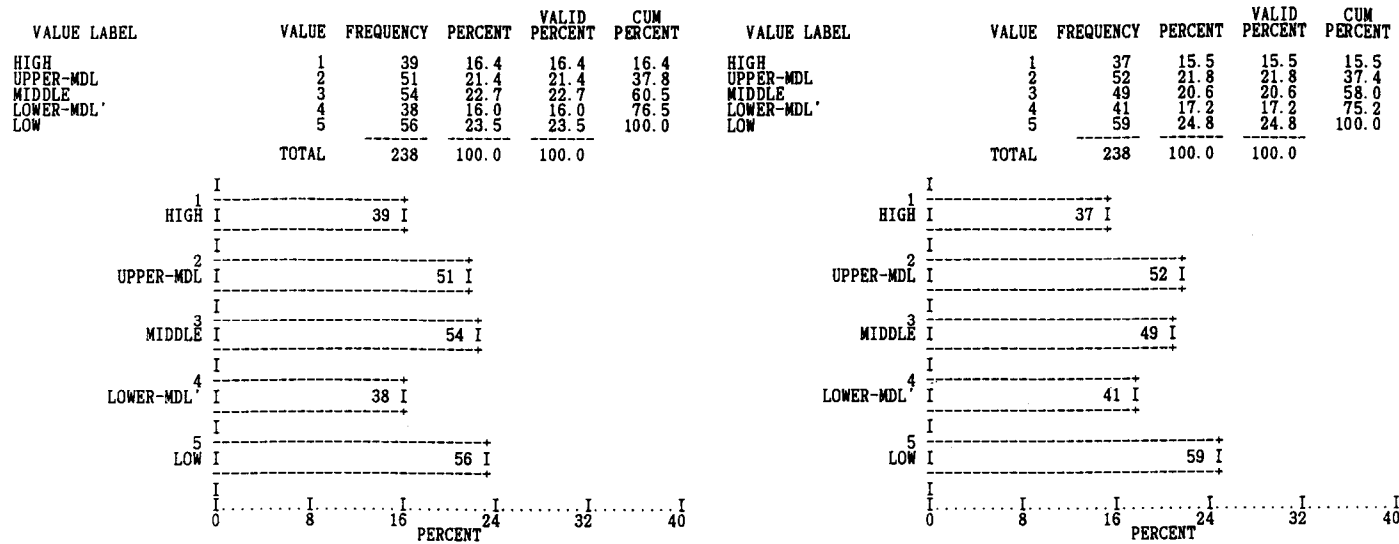
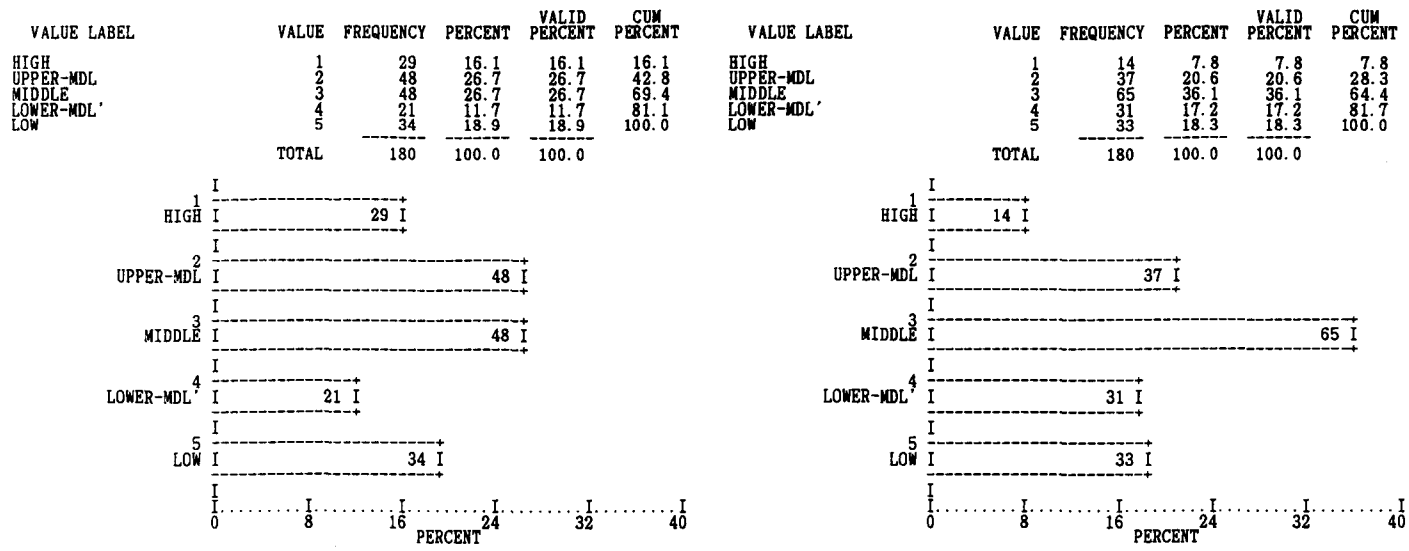


表 4 b 入学時点と三年生時点の全体の成績構成：女子（右が入学時・左が三年時）



出すると（前者は五段階の変数で後者は三段階）、男子で 0.37、女子で 0.21 となっている。この数値は、入学時の成績がその後のモチベーションをより強く規定するのは男子であることを示すものである。

- (9) これは後日 α 高校の卒業生との面接から得た知見であるが、男子生徒の場合は、成績不振から学校への不適応を示す生徒が時々見られるとのことである。
- (10) なお、補足しておけば、この竹内のデータは α 高校と同一の地域の調査から得られたものである。
- (11) 例えば、われわれが「〇〇高校卒のくせに」というとき、社会化の不首尾の責任を個人に帰属することで、「進学校」に対する信仰（Meyer, 1977）に瑕がつくのを防ぎ、その「聖性」の維持に貢献していることに気づくべきである（Garfinkel, 1956）。学校が、もし純粋に教育・指導技術だけで社会化を達成しているのであれば、社会化の不首尾は学校の指導体制・方針に対する重大な反省をもたらさずにはいないだろう。
- (12) マイヤーのいう「制度化された組織」とは、制度的に承認された活動と内部での実際の活動とが「脱連結」された組織のことであり、学校もその一例である。このような組織のサバイバルに影響するのは、一般に、実際の組織活動の成否そのものではなくて、「正しく活動している」と社会的に信用されているかどうかである。例えば、金融機関（これも「制度化された組織」の一つである）の成長が収益結果そのものよりも「スキャンダル」に影響されることを見よ。
- (13) ここで「演じている」という表現を用いたが、これは決して主観的な意味においてはではない。というのも、 α 高校の社会化性能に対して最も厚い信頼を寄せているのは、他ならぬ彼ら自身であり、彼らに「欺瞞意識」は希薄だからである。

このことは、 α 高校の成績上位層の男子は自分の成功を自分の「能力」ではなくて α 高校の社会化性能に帰属する傾向が強いことによって示される。われわれは今回の調査で「仮に、あなたが今の高校より少し入試の易しい高校に行っていたとしたら、あなたの進路志望はどうなっていたと想像しますか」と質問したが、この質問に対して、「今の志望校よりも偏差値の低い学校を志望していた」あるいは「進学を志望しなかった」と回答した生徒は、全体で 54.3% であるのに対して、男子で成績《上》で入学した生徒の場合は 75.0% と群を抜いている（女子の成績《上》で入学した生徒の場合は 58.0% であり、全体の比率と殆ど変わらない）。また別の設問で、われわれは「偏差値の高い高校に行くと、大学入試の実力がつくと思いますか」と質問したが、この意見に賛成する生徒は、全体で 44.5% であるのに対して、男子で成績《上》で入学した生徒の場合は 74.4% であり、ここでも群を抜いている（女子の成績《上》で入学した生徒の場合は、51.7% である）。

ところで、チャーターによる社会化は学校の内部的な諸過程とは独立に作用するというのがマイヤーの仮説であったが、チャーターによる社会化効果が最も明瞭に現われている層が、その内部の指導・教育体制を最も信頼する層であるという点に一つの逆説を見ることができる。チャーターによる社会化は、原理的には「イニシエーション」の儀礼が個人を変容させるのと同じ過程を経るものである。儀礼による個人の変容が最も強い効力を発揮しうるのは、その効力の発揮される「からくり」が隠蔽されている場合であるという命題は、チャーター社会化論にも妥当するようだ。

- (14) 本節とは別の説明原理として、男子生徒と女子生徒では差別的指導が行われているという前提を置くこともできなくはない。実際、男女で指導方針が異なることや、同じ成績に対しても教師の評価が男女で異なることは、女子の学業達成の低さを説明する仮説としてしばしば提示されてきた（Duru-Bellat 訳書 1993 ほか）。しかし、これらの仮説は学業成績重視の α 高校においては現実的ではない。生徒の成績を上げることに対する高校側の熱意には相当なものがあ
- 性別はもとよりいかなる根拠からも成績上昇が悪く評価される可能性は想定しがたい。教師とのインタビューでも、男女で指導に変わらないことは強調されていたし、後日面会した女子の卒業生も、女子だからという理由で先生に期待されないというようなことはまずないと報告している。加えて、偏差値のような客観的な数値を重視する傾向も教師の主観的バイアスを抑止するものである。それにそもそも、われわれが本稿で確認した傾向は、男子の成績は上がるが女子の成績は下がるといった単純なものではなかった。男子の成績は二極化し、女子の成績は中間化するのである。この傾向を説明するモデルとしては、競争に参加できる / できないとい

う二分法よりも、競争に「真剣に」取り組む／取り組まないという二分法の方がより適切である。

- (15) 引用に公平を期すために付言しておけば、クランス自身はインポスター感情が女性に特有のものとは言っていない。しかし、既にブルデューの議論を検討したわれわれにとって、それが競争から排除された者の心性であることは直観的に理解できる。
- (16) この「他人は自分を理解できていない」という意識が強くなると、彼女が他者と結び結ぶ対人関係は「不自然さ」を増すだろう。その結果、心理的孤立は深まり、自己を「正しく」評価することはますます困難になるだろう。そもそも、卓越者が卓越者たりうるのは、卓越するだけの力量が備わっているからであるとともに、他者からその力量を認証される機会に恵まれているからでもある。ここで、そのような「機会」を一種の「社会資本」と考えるのであれば、女性のハビトゥスはこの「資本」を増殖させる可能性を自ら狭めているということもできよう。
- (17) 「人は行動し、運動し、努力することにはいかなる快感をあげようとも、そのうえになお、自分の努力が無意味でないこと、また自分がその歩みの中で前進していると感じていなければならない。ところが、いかなる目的にも向かっていないときには、またそれと同じことだが、目ざす目的が果てしない彼方にあるときには、人は前進していないも同然である (Durkheim 訳書 1985, 303 頁)」。

また、次に挙げるのは、「インポスター体験について」という課題で、ある女子大学生に高校時代を回顧してもらったレポートの一部である。「高校時代、(中学の時も) 自分でいうのも何ですが、学校の成績はかなりよかったにもかかわらず、次回もおなじような成績が取れるかいつも不安でした。……良い成績を取らなければと思い、その通りに良い成績を取ると、またその事が次回へのプレッシャーとなり、自分で自分の首をしめているようでした。……自分が嫌いな教科はより勉強し、また、いつも成績の良い教科は、さらに良い成績をと、手を抜くところはありませんでした。友達にも『それだけやっているのなら大丈夫』と言われても、いつも『そんなことはない』と思い続けていました。『もう(試験準備を) やったから』と言える人がいつもうらやましく思っていました。私は、『やり終えた』と思ったことは一度もなかったからです」。

- (18) ここでの論点と密接に関連するデータが先の『報告書』の中で河合と竹内によって既に紹介されているのだが(前掲報告書, 第2部第5章, 表V-2, 3), それをここで再び参照しておこう。
α 高校の女子生徒の場合、「努力家」の生徒——勉強時間の長い生徒、「授業に打ち込んだ」

表5 「大学入試に能力が重要である」の回答を勉強時間(一日当たり)別にクロス集計
(左が男子・右が女子)

	能力が重要である	能力が重要でない	合計
5 時間以上	20.6%	79.4%	34 人
3 ～ 4 時間	22.6%	77.4%	53 人
2 ～ 3 時間	28.4%	71.6%	67 人
1 ～ 2 時間	31.6%	68.4%	38 人
1 時間以下	26.1%	73.9%	23 人
合計	26.0%	74.0%	215 人

A. I. C. 値 = - 1.99

	能力が重要である	能力が重要でない	合計
5 時間以上	32.0%	68.0%	25 人
3 ～ 4 時間	25.6%	74.4%	43 人
2 ～ 3 時間	19.7%	80.3%	61 人
1 ～ 2 時間	9.5%	90.5%	21 人
1 時間以下	4.0%	96.0%	25 人
合計	19.4%	80.6%	175 人

A. I. C. 値 = 3.63

表6 「大学入試に能力が重要である」の回答を「授業への打ち込み」別にクロス集計
(左が男子・右が女子)

	能力が重要である	能力が重要でない	合計
打ち込んだ	8.8%	91.2%	34 人
やや打ち込んだ	25.8%	74.1%	112 人
打ち込んでいない	34.8%	65.2%	69 人
合計	26.0%	74.0%	215 人

A. I. C. 値 = - 5.71

	能力が重要である	能力が重要でない	合計
打ち込んだ	32.0%	68.0%	6 人
やや打ち込んだ	25.6%	74.4%	93 人
打ち込んでいない	19.7%	80.3%	76 人
合計	19.4%	80.6%	175 人

A. I. C. 値 = - 5.06

と答えている生徒——ほど、大学入試に「生まれつきの能力」が重要であると答える傾向にある。男子の場合はこの逆の傾向すらある。「授業に打ち込んだ」生徒ほど、「生まれつきの能力」を重視する者は少なくなる（表6）。つまり、女子の場合は、努力の背後には努力そのものをキャンセルする信条——「生まれつきの能力」の重視——が隠されているのである。

- (19) 「高校を受験し、周囲の予想通りの（学区トップの）高校に入ることになった。高校に入ってから……成績は下がって、それからは中学の時に比べて少し気楽な生活を過ごすことができた」。これは、中学時代に学年トップであり、「インポスター感情」を抱いていたある女子が「進学校」に入学後の感想を回顧したレポートの一部である。このレポートから「トップでなくなることの敗北感」を読み取ることは難しい。
- (20) 本項で論じたような「女性的心性」が「進学校」以外の生徒に対しても一般化できるのかどうかという点では慎重であるべきだ。例えば、菊地他（1993）は、同じくハビトゥス論を援用しながら、また別種の「女性的心性」を描いている。しかし、ここで一つだけ提言しておけば、本項で描いたような心性を抱く女子生徒の数を過少に評価してはならない。それというのも、 α 高校の女子生徒にせよ、クランスの臨床例となった女性にせよ、彼女たちは自分の心性を確認することができる段階にまでよりすぐられた層だからである。彼女たちの背後には、それを確認する機会すら与えられることなく、ゲームそのものからの自発的撤退を余儀なくされている層が控えているはずだ（Bourdieu & Passeron 訳書 1991, 第 II 部第 3 章「排除と選抜」）。
- (21) この「人並主義」という言い回しは、学生のレポートからヒントを得たものである。それは注(17)の場合と同じく、ある女子大学生に高校時代を回顧してもらったレポートである。
- 「私の通学していた高校は県内でも有名な進学校といわれ、また名門校でもありました。当然優秀で良く出来る生徒が集まっていたので、私の高校時代の成績はあまり良くなく、いつも中の上ぐらいの辺りででした。……もちろん私は良い成績を取りたいと願っていたし、先生や親から厳しく言われると次は良い点を取ろうと努力するのですが、全く成績は上がりません。……中の上ぐらいという位置は私には丁度良い位置だったのかもしれませんが。取りあえず下位ではなくさりとて上位でもない。その当時の私はもちろん優等生ではなかったので、優等生の気持ちは分からなかったけれど、自分の心の中ではそういう良く出来る人になりたいと思う反面、今のままの程々の成績で十分だという気持ちと両方ありました。だから成績も一向に上がらなかったのかもしれませんが。また男女共学だったので知らず知らずの内に男子生徒にはかなわないと思っていたのかもしれませんが」。
- (22) 前掲報告書 141 頁参照。

参 考 文 献

- Bourdieu, Pierre 1979, 石井洋二郎訳『ディスタンクション I・II』藤原書店 1990
 —— 1990, 石崎晴己訳「性の社会的構築」『現代思想』18 巻 4 号
- Bourdieu, Pierre & Jean-Claude Passeron 1970, 宮島喬訳『再生産』藤原書店 1991
- Clance, Pauline R. 1985, 小此木啓吾・大野裕訳『インポスター現象』筑摩書房 1988
- Deal, Terrence & Allan Kennedy 1982, 城山三郎訳『シンボリック・マネジャー』新潮社 1983
- Durkheim, Emile 1897, 宮島喬訳『自殺論』中公文庫 1985
- Duru-Bellat, Marie 1990, 中野知津訳『娘の学校』藤原書店 1993
- Garfinkel, Harold 1956, "Conditions of Successful Degradation Ceremonies", *American Journal of Sociology*, Vol. 61, No. 5, pp. 420-4
- 岩木秀夫・耳塚寛明編 1983,『現代のエスプリ 195 高校生』至文堂
- 菊地栄治・加藤隆雄・越智康司・吉原恵子 1993,『女子学生文化にみるジェンダーの現代的位相』京都大学教育学部教育社会学研究室 1993,『現代高校生の「受験生活」についての実証的研究』
- Meyer, John W. 1970 a, "The Charter: Conditions of Diffuse Socializations in Schools", in *Social Processes and Social Structures*, ed. by W.R. Scott, Holt, Rinehart & Winston, p. 564-578
- 1970 b, "High School Effects of College Intentions", *American Journal of Sociology*, Vol. 76, No. 1, pp. 59-70

- 1977, "The Effects of Education as an Institution", *American Journal of Sociology*, Vol. 83, No. 1, pp. 55 - 77
- Meyer, John W. & Brian Rowan 1977, "Institutionalized Organizations : Formal Structure as Myth and Ceremony" in *American Journal of Sociology*, Vol. 83, No. 2, pp. 340 - 63
- 竹内 洋 1991, 「日本型選抜の探究——御破算型選抜規範」『教育社会学研究』49 集
- Weber, Max 1956, 世良晃志郎抄訳『支配の社会学・Ⅱ (1962)』創文社 1962